

# 民話「こんぶくろ池・名前のおこり」

ずっとずっと大昔のお話になりますが、そのころ田や畑で仕事をしていたお百姓<sup>ひやくしやう</sup>さんたちは、のどがかわくと、この池のきれいな清水<sup>しみず</sup>をのみにしていました。牧<sup>うきぎ</sup>の馬たちも、木にさえずる小鳥たちも、野をかけまわる鹿<sup>しか</sup>や兎たちもこの池に集まって、それはそれは平和な風景を見せていました。

あるとき、畑に出ていた若<sup>わか</sup>ものが、手をついて腹<sup>はら</sup>ばいになり、池に顔をつけておちゅうでのみました。そのとき、池の水<sup>みづ</sup>が錦<sup>にしき</sup>いろに輝<sup>かが</sup>いているのに気づきました。びっくりして顔をあげると、目の前に美しいこんぶくろ<sup>こんぶくろ</sup>（巾着<sup>きんちゃく</sup>＝布で作った小袋<sup>こぶくろ</sup>）が浮<sup>う</sup>かんでいました。

若<sup>わか</sup>ものは思わず手をのばしましたが、波<sup>ゆ</sup>にゆらゆら揺れているこんぶくろは、なかなかとれません。木の枝につかまって足をのばしたり、いろいろやっているうちに、こんぶくろは見えなくなっていました。若<sup>わか</sup>ものは、村に帰ってその話をしました。村の人たちは、「それはきつと米を生むふくろだんべ…。」「いや、それは子<sup>こ</sup>を生むふくろだんべ…」と、つぎからつぎへ伝わ<sup>つた</sup>ってうわさ話<sup>はなし</sup>に花<sup>さ</sup>が咲きました。それからは誰<sup>だれ</sup>言<sup>い</sup>うとなく、こんぶくろ池<sup>いけ</sup>と呼<sup>よ</sup>ぶようになったということです。

